
黄昏の底にあるもの

夕風 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の底にあるもの

【Nコード】

N1409V

【作者名】

夕風 翠

【あらすじ】

或る男が迷い込んだのは、真っ白い世界だった。そこに居る女曰く、そこは違う世界だという。

気がついたら、俺は白い部屋の中にいた。何だろうと思い、辺りを見回すと多分女らしい人間を見つけた。

「やあ、目覚めたか」

さても興味のなさそうな声。俺はふと湧き出た感情を口に出そうとする。だが――、何を言えいいか分からない。

「ここが何処だと聞こうとしたんだろう？ まあ無理もないからな。だが、オレは答えないからな。自分で結論を出してくれ」

一方的な声。俺はどうしてこんな状況になったか思い出そうとする。だが、分からない。思い出すどころか、記憶が徐々に薄れていく感覚が。

「まあまあ、そんなことは後にしていいじゃないか。そんなことよりも、オレの話を聞かないか？ タメになるぜ。あと、オレの名前はない。それだけは明言しておこう」

胸も張らずに、そいつは嗤う。多分女だから、彼女と呼ぶことにしておこうと思いつつ、辺りを探り見る。窓はない。辺りは白い壁に囲まれ、まるで箱の中だ。天井も白く塗られて、ドアすらない。

ふと考えると、現実の時刻ならば通勤しなくちゃいけないことに気がついた。だが、そのときは確か――。

「俺は確か、自分の部屋で寝ていたはずだ」

「ああ、お前は自分の部屋で寝ていたさ」

あっさりと首肯する彼女。では彼女が俺を連れ去ったのか？

「まさか。オレはお前を連れ去りはしていない。そんなことをして何のためになるんだ？ 自意識過剰も程程にしないと、何時まで経っても餓鬼のままだぜ」

ひどい暴言を吐きながら、彼女はベッドの横にある椅子に座る。
「……………看病気分か？」

「まさか。お生憎様だがお前は餓死することも無ければ、脱水症状

で死ぬことも無い。答えを導き出さなければ永遠に此処にいるんだよ」

——冗談だろう？ 何なら今すぐに舌を嚙んで——。

だが、その動作をしようとしても、そのやり方が分からない。

「諦めてオレの話を聞くんだな。まあ、今は疲れているらしいから眠るといい。話はそれからだ」

その言葉を聞いた途端に、俺の意識は闇の中に埋もれていった。

まどろみの中で、俺は日常の日々を必死に思い描く。

ちよつとの事ですぐに登校拒否する内親王殿下のくだらないニュースを聞きながら、朝飯の準備を開始する。ニュースキャスターは馬鹿丸出しで世の中はなっていないと表面上で嘆いている。

……はっ、お前らの頭の方が狂ってんのさ。そう心で吐き捨てて着替える——。

すると、ここでまどろんでいた意識が戻り始めた。

「よく寝たな。寝起きの気分はどうだい？」

彼女の冷笑を振り払うようにして、俺は上半身だけ起き上がる。

何時間寝たんだろうか？

「時間という概念はここには流れていない。感じたとすれば、それはお前がまだそういう感覚を持ち合わせているという証拠だな」

つまり、ここは俺が暮らしていた二十一世紀初頭ではないのか？

「ご名答。まあ、ここまでヒントを出して分からなかったらさすが

に愚図の権化だがな」

他の音が無い世界で、彼女の声が明瞭に聞こえる。それは、俺が当たり前のように生き、死んでいくと思っていた二十一世紀では考えられなかった。

「ご察しの通り、ここはお前の居た二十一世紀初頭ではない。それとは隔絶された空間……とだけ教えておこう」

「……俺はなぜここに来た？」

彼女は冷酷に微笑んだ。それが――答えでもあるかのように。

またしても意識がまどろみ始めて、俺はまた眠りに落ちた。

また飛んだ意識の中、俺はまたしても必死に日常の事を思い浮かべる。だが、ついさっきまで思い浮かんでいたはずの事が思い出せない。

代わりに思い出すのは、高校生時代の自分。

いつも何かに文句を言っている馬鹿な連中の言葉を聞きながら授業に入る。馬鹿共はどいつもこいつも自分に出来もしない事をのたまい続ける。自分は強い、誰が来ても負けはしない。あいつってマジうざいよね？ エトセトラ。

そんな無知な言葉は、何も生み出せはしない。誰かが語った言葉は、自分で咀嚼して言い換えなければただの飾り。

近くでは、頭の緩い連中が生産性の無い話をしながら今を謳歌していた。連中は今を楽しまなくてはと笑い合う。

今を楽しむ？ それは本当の今じゃない。誰かに煽動されて謳歌した気をしているだけだ。くそったれなどこぞのブームと一緒だろう？ なら、偽善だらけだがよっぽどためになる新約聖書でも読ん

だらどうだい？ 汝、隣人を愛せよ。小賢しいが、連中の緩んだ頭のネジでも分かるだろうからな。
そんなとりとめもない事を思い出すと、俺の意識はまた開かれていった。

「よう、また寝ちまったらしいな。体は大人でも脳は子どもかい？」
彼女が吐く言葉に揺り起こされた俺は、起き上がりとして自分の体の感覚がないことに気づいた。

彼女が何かしたのか？ そんな疑問が頭の中に浮かび上がる。
彼女は面白そうに鼻を鳴らして、

「オレはお前に何もしていないさ。ただお前が起き上がるのを今か今かと待ち侘びていただけだ」

では、彼女の食事や水分補給はどうなっているのだろうか。

「それは、簡単さ。オレはそんなものを感じない。空腹なんて感じないさ」

つまり、人間では無いということか？

「それはノーコメント」

そこまでは教えてくれないか。と、俺は阿呆なことを考える。だが、それを伝えるべき言葉が見つからない。強いて言うならば、記憶の欠片が霧の如く消えていく感覚。

彼女はそんな俺を見て笑う。

「それよりもさ、オレがお前に質問するから、それに答えないか？
少しは面白いかもしれないぜ」

悪戯めいた笑みを浮かべる彼女。今は眠くないから聞いても良いかと俺は頷く。

「そうかい。それじゃあ、最初に聞くけどお前は自分がいた境遇をどう振り返る？」

彼女の言葉に、俺は少し考えた。今まで、俺が思い出そうとしていた様々な出来事を思い出したから。

俺は自分を不幸とは思ったことはなかった。だが、自分が幸運な人間。選ばれた人間だのというふざけた考えも持つてはいない。ただ単に普通の家庭に生まれた子供。ただそれだけだ。

学生時代、俺は友人も居なければ話しかけてくる人間すら居なかった。俺自身、そんなのは興味もなかったから交流が無かっただけかもしれないが。だが、当時の主流派と言われていた連中の頭の中身に吐き気を覚えていたことは印象に残ってる。

大学を出て、運よく内定がもらえたときには、年老いた両親が祝福してくれた。そして、俺は家を出て借アパートで一人暮らしを始め、そこそこの人生を送っていた。

たったそれだけだ。

「それは随分幸運な人生じゃないか」

それなのに、彼女は静かに微笑む。

何故だろうか。確かに虐めにも遭わなかったし、就職も出来た。だが、それならば俺なんかよりも十二分に人生を謳歌している連中も居るじゃないか。

心の奥底で、俺は自嘲気味に呟く。

「それは違うさ。お前は少なくとも自分の生き方に悲観していない。何も感じていないわけでもない。少なくとも感じられる程度には人生を歩んできた。違うか？」

それを言われればそうかもしれない。だが、俺は彼女が言うような生き方はしていない。

「今を謳歌する？ それは本当に今を生きていない連中が吐く台詞だよ。今よりもっとと背を伸ばして、拳句幼稚な自己満足に終結する。馬鹿げた話だよ。自分の滑稽さに気が付いていないのだから」

憎悪すら感じ取られる言葉。だが、その言葉は俺が今まで抱き続

けていたものだった。確かに、連中からは何も感じなかった。今までの人生の事も。何もかも。

「友人など、別に数人居れば十分だ。多ければいいというものでもない。オレはいつも思うんだ。何で自分に友達が居ないからって死ぬのかなって」

それは、ただの自己憐憫だ。自分が必要とされているのかなんて考えるまでも無い。必要とされなくても、生きることは出来るはずだ。

だが、謂れの無い仕打ちを受けて死ぬ連中も居る。彼らは最後に何を思うのだろうか？

「――さあな。死人に口なしとの言葉通り、オレには想像することしか出来ない」

哀れそうに口を歪める彼女。俺はかすかに眩暈を覚える。どうやら、もう一回寝る必要があるらしい。

「……大丈夫さ。いくら寝ていても構わない。時間なんて無いんだからな」

優しい言葉聞いた直後、またしても俺の意識はただ暗闇へ。

起き掛けの頭を覚醒させて乗った通勤電車の中、俺は流れ去る景色を眺めていた。灰色に染まった空は限りなく暗く、途方も無く重たい。電車の中は偏った三流週刊誌の広告に満ち溢れている。内容は言わなくても分かる。誰にでも考え付く言葉で塗り固められた意図が無い悪意。

そんな三文記事に吐き気を覚えながら、俺は職場へと向かう。中堅会社に就職した俺の仕事は簡単に言えば事務方。現場の仕事は馴染めなくて事務方に回ったというのが本当のところだ。現場には舐められて、上司からは体のいい駒として扱われる。だが、それでも

別に良い。書類作業ならば誰にも声をかけられずに済む。

昼休みになっても、俺はどこにも行かずに職員食堂で安いうどんを啜る。最近、食堂の人に声を掛けられるようになったが、愛想程度に一言二言言うだけ。あまり人とは話したくないので。

仕事が終わると、来た道に戻り家に戻る。時間は八時。何もすることもないので横に転がる。テレビを付けると、馬鹿な芸能人が頭の良さを競っていた。まさに馬鹿が見る番組。作られた虚構であるとも知らずに見入っているのだから恐れ入る。そんな日常を送っていた。そうだ、俺は此処くるまでは、こんなくだらない日常を送っていたんだ。

では、俺は何で此処に連れてこられたんだ？ 彼女は俺を連れてきてはいないと言った。ならば、自分から望んで来たのか？ そんな能力は俺には無い。ならば、何故だ？ まとまらない結論を考えながら、俺の意識はまた白い箱の中に戻った。

「目覚めたかい」

あっさりとした彼女の言葉に違和感を覚えながら、俺は変わらない白い部屋の天井を眺め続ける。

「……………どうやら、そろそろ結論の時が近づいたらしいな」少し悲しそうに、彼女は嗤う。それはまるで自嘲気味な表情。つまり、俺は核心に近づいたということか。

そう思うと、少し悲しい。

「正確に言えば、戻りたくない。そう思い始めたのか？」

相変わらず俺の心を読んだかのように彼女は言う。正確なトレースだが、言葉の響きに尾は確かに暗いものがあつた。

自分が、来た理由は分からない。そして、その疑問と同じ位の疑問が俺の脳内を渦巻く。

つまり――彼女は何故此処に居るのかという理由を。

彼女は只静かに微笑むだけ。相変わらず答えを教えてくれはしない。ならば、推測するだけだ。

考えられる可能性は二つ。一つは、俺が死にかけていて、彼女が死者を導く使いであるとする説。

そして、もう一つは――、余りに非現実過ぎて言う気にもならない。

少し休みたくなって、俺は重い瞼を強引に閉じた。

大学生活も終わりに差し掛かった頃、俺は一人の人に好意を持った。勿論、恋心とかじゃない。只、自分に共感できたからその人を見ていたのだと思う。

その人と話した事は三回だけ。けれども、素敵な時間だった。世の中の事を話し合っただけだけれども。それでも、楽しかったんだ。だけど、ある日突然その人は俺の前から消えた。どこに消えたのかは分からない。だが、その人は消える前にこう言っていた。

「なあ――、この世界は不愉快過ぎる。だけど、オレは此処で生きなくちゃいけないんだ。哀しいな」

何処か遠い目で呟いたその人。俺は何も言い返せはしなかった。言い返せる言葉も、励ましの言葉さえもその人には無駄だと知って

いたから。

——そうか、これはそういう事だったのか。ならばこれは余りに皮肉だ。今ならば、あの人の想い出がこのタイミングで出てきたという事が全ての証明。

俺は——彼女の世界に入り込んだ。どういう理論でこうなったかは知らないけれど、連れ込まれた訳でもない。自ら意図してきた訳でもない。だが、それしか説明できる言葉は無かった。

「ご名答。よく辿り着いたな」

気が付くと、ただ白い壁に覆われていた部屋に一つのドアが付けられていた。多分、あそこに行ければ、俺は此処から元の世界に帰る事が出来るのだろう。

「種明かしはあまり好きじゃない。だから、お前が此処に来た訳を話しはしない」

彼女は静かに語る。

「本当ならば、お前は此処に来ちゃいなかったんだ。まだ若いし、仕事にだって就いている。此処にいるのは最初からオレ一人で十分だ」

音のない部屋に、彼女の独白が響く。

「一つだけ聞いてもいいか？」

俺は首肯しながら、静かに彼女の目を見る。彼女の眼は相変わらず笑っている。

「——お前はオレとこのまま居る世界と、元の世界。どちらが良い？」

哀しそうに、彼女は笑った。

提示された二つの道を想像して、俺は苦笑した。

一つはこのまま元の世界に戻る道。下らない日常、だが自分という存在が二十数年来実在したかけがえのない世界である事は事実。

もう一つは、このまま彼女と永遠にお喋りを繰り返す道。彼女の話ならば、永い間でも聴き続けられる気がする。だが、それを選べば俺の人生はそこで終了。現実の世界に戻る筈などない。

ならば、決まっている。

俺は――現実より幻想を選ぶ。鬱に塗れた灰色の日常よりも、白い箱の中で静かに聞き手になった方が良い。甘えだろうが、現実逃避だろうが、そんな事はもう良い。

「そうか……本当に良いのか？」

彼女は静かに尋ねる。俺は首を縦に振る。

「……良いだろう、なら何時までも聞いていておくれ。オレの下らなかつた日常の出来事を」

静かに彼女は微笑む。俺もまた、自分の世界となった白い箱の中でゆっくりと目を閉じた。何時までも、彼女の聞き手となる事、それが俺の選んだ世界の終着点だった。

（後書き）

とりあえず、昔書いたのを出してみました。
幻想はとこにでもあり、誰もが現実と折り合いをつけて生きている
のかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1409v/>

黄昏の底にあるもの

2011年7月26日03時44分発行